

第2章 内務省の真価

常盤台の最大の魅力 - 本家の真価

常盤台の最大の魅力は都市計画・都市デザインの類まれなすばらしさにあります。都市計画の専門家である越沢明氏は、「昭和初期に開発された田園調布、成城学園、常盤台——これを超える高級住宅地は今日、首都圏を見渡してもなかなか存在しない。この中で都市設計、都市デザインの観点からみて最も美しく、優美にデザインされた住宅地は常盤台である。」[\[1\]](#)と述べています。

その第1の理由として、「常盤台こそは都市計画の行政プランナーが設計した最初で最後の民間分譲地である。つまり民間宅地開発と都市計画行政の一体協力で生まれた唯一の住宅地であり、これこそが常盤台の優美なアーバンデザインの出生の秘密なのである。」と述べています。

越沢氏は、「田園調布は民間主体でつくられた高級住宅地である(手法は一人施行の区画整理)。これに対して、内務省の都市計画課の設計によりつくられた高級住宅地が常盤台である。」[\[2\]](#)と、田園調布と比較し、その違いを述べています。

常盤台を開発した東武鉄道・根津嘉一郎社長

常盤台を開発分譲したのは、初代・根津嘉一郎社長が率いる東武鉄道です。そして、設計を担当したのが、当時、東京の都市計画行政を行っていた内務省都市計画課でした。設計者は1934年(昭和9年)に東京帝国大学建築学科を卒業し、内務省官房都市計画課第二技術掛に配属されたばかりの弱冠二十数歳の小宮賢一という青年でした。根津社長は、当初の碁盤目状の街路デザインにあきたらず、内務省に設計を依頼したということです。

民間主体でつくられた高級住宅地より、官民一体でつくられた高級住宅地の方が、都市デザインにおいて優れている、という議論はやや強引ではありますが、いずれにしても、官民一体で開発された(しかも官というとき、実質的に内務省という国家機関であった)のが常盤台という街のユニークな点であるということが言えます。

日本最初の田園都市 - 田園調布

田園調布が日本で開発された最初の「田園都市」であり、日本を代表する高級住宅地であることは周知の通りです。田園調布の開発を行ったのは、東急の前身である田園都市株式会社であり、その設立は、大正7(1918)年9月2日です。渋沢栄一が、晩年実業界引退後、日本に田園都市建設の必要性を感じ、構想し、同社設立の発起人となり、息子の渋沢秀雄他にその実現を託したものです。

このように日本の田園都市開発の先行者は、渋沢栄一であり、田園都市株式会社であり、田園調布なわけですが、しかし、そもそもこの田園都市というコンセプトは、内務省により日本にもたらされたものです。内務省地方局有志により『田園都市』が出版されたのは明治40(1907)年です[3]。1906年に内務省地方局課長の井上友一が中心となって英国のA・R・セネット著『田園都市の理論と実際』(1905年)の翻訳を行い、その内容を受容、消化して内務省地方局としての田園都市論を展開したものです。

内務省地方局有志『田園都市』

エベネザー・ハウードの"Garden City of To-morrow"(『明日の田園都市』)が出版されたのが1902年、その元となる" To-morrow; A Peaceful Path to Real Reform" (『明日一真の改革に至る平和な道』)の出版は1898年です。「田園都市」は、内務省地方局によって日本に紹介されたのです。しかし、ここで注意が必要なことが2つあります。まず、第1は、ハウードの田園都市の建設・管理・運営に関わるソフトウェアや、土地・建物の市有・市営論には触れられていないことです。第二に、A・R・セネットの著書は、ハウード流の社会哲学を含むものではなく、工学的・施設的な個別事例を網羅すること、設計と建築技術に主眼を置いたものだったことです。わかりやすく言えば、セネットは、「理科系人間」だったのです。[4]

都会と農村の結合 - 抜け落ちた社会思想

内務省地方局有志によって描かれた「田園都市」とは、シンプルに都会と農村(田園)を結合したものと見てよいでしょう。それは、次のようなものです。「清新なる農村の趣味を活用して現都市を改良し、または新都市を造りて、大都会にまぬがれがたきの弊風を絶たんとすることその一なり。健全なる田園生活を尊重して、これに加味するに都市各般の文明事業をもってし、ますます農村の培養とその改良を図らんとすることその二なり」[5]

つまり、田園調布を始めとして日本で開発された田園都市からは、ハワード流の社会思想、社会哲学は抜け落ちていきます。日本の田園都市の元祖・田園調布の開発につながる渋沢栄一が描く田園都市とは次のようなものであり、前述の内務省地方局が描いた田園都市に重なります。

「元来、都会生活には自然の要素が欠けている。・・・(中略)・・・人間は、到底自然なしには生活できるものではない。・・・英米では『田園都市』というものが発達してきている。この田園都市というのは簡単に言えば自然を多分にとり入れた都会のことであって、農村と都会とを折衷したような田園趣味の豊かな街をいうのである。私は、東京が非常な勢いで膨張していくのを見るにつけても、わが国にも田園都市のようなものを造って、都会生活の欠陥を幾分でも補うようにしたいものだと考えていた。」(渋沢栄一著『清淵回顧録』)

中産階級に優良な住宅を供給

つまり、誤解を恐れずに言えば、当時、資本主義の先進国である欧米で新潮流となったハワード流の田園都市は、生存可能最低水準(subsistence level)の賃金により、悲惨ともいえる生活にあえぐ労働者階級の救済、その労働と生活環境の改善という社会思想を背景に出てきたものであるのに対し、日本に紹介され、開発された田園都市は、明治維新以後の欧米化、近代化の中で台頭してきた中産階級に優良な住宅を供給するという性格を持つにいたったのです。それが、日本の田園都市と言えるでしょう。これはどちらが良いとか悪いという問題ではありません。

ハワードと井上友一

「田園都市」を執筆した内務省地方局有志の中心人物である井上友一^[6](当時課長、後に、内務省神社局長、法学博士、東京府知事)は、救済・社会事業に貢献した内務官僚として知られ、地方自治、地方改良を説き、その思想、活動は、二宮尊徳をシンボルとする報徳運動につながります。その意味ではハワードの社会思想と根底でつながるものがあります。しかし、その井上が、ハワードの田園都市から社会思想をスッポリと抜き取ったのは、興味深く、皮肉なことと言っても良いでしょう。

このため、「ハワードの『明日の田園都市』の理念ではなく実用手引書のセネットの『田園都市—その理論と実践』が受け入れられたことで、ガーデンシティが求心的にイメージされにくくなってしまふ・・・こうして内務省経由の田園都市情報は、報徳運動のなかに吸い取られ跡形もなく消えていくのである。」^[7]という猪瀬氏のような指摘につながります。

内務省で生き続けた田園都市

しかし、田園都市は内務省の中で生き続けることとなります。その再生が、内務省地方局有志による「田園都市」が出版された1907年から、ほぼ30年を経て、内務省都市計画課の設計により、東武鉄道が開発し、昭和11(1936)年に分譲が開始された常盤台住宅地なのです。そして、常盤台住宅地こそが、内務省都市計画課が、大正期から昭和初期に、民間により開発されることになる郊外住宅地、田園都市に対して、本家の真価を発揮し、見せしめんとして設計された「優美なアーバンデザイン」[\[8\]](#)であると言えるのです。

[\[1\]](#) 「東京都市計画物語」越沢明著、日本経済評論社(1991.11)、ちくま学芸文庫(2001.3)

[\[2\]](#) 「東京の都市計画」越沢明著、岩波新書(1991.12)

[\[3\]](#) 「近代日本の郊外住宅地」片木篤、角野幸博、藤谷陽悦 編著、鹿島出版会 (2000/3)

[\[4\]](#) 「土地の神話(日本の近代 猪瀬直樹著作集)」小学館 (2002/4)

[\[5\]](#) 「田園都市」内務省地方局有志 (1907)

[\[6\]](#) 井上友一(いのうえともいち)(1871—1919)

救済・社会事業行政に貢献した内務官僚。法学博士。石川県金沢市に生まれる。東京大学法科卒業後、内務省に入り、主として地方行政を担当。1900年(明治33)にパリで開催された万国公私救済事業会議に出席、各国の救済事業を視察した。地方改良の諸事業、感化救済事業講習会の開催など、社会事業行政への内務省における推進役として働いた。神社局長などを経て、1915年(大正4)に東京府知事となった。当時の社会問題の激化、1917年の風水害、とくに1918年の米騒動にあたっては公設市場、簡易食堂、日用品の廉売など経済保護事業を促進した。開明的な官僚であったが、公的救助義務主義に終始反対する立場をとった。主著『救済制度要義』は名著として知られる。[小倉襄二]『『戦前期社会事業基本文献集 19 救済制度要義』(1995・日本図書センター)』 出典：日本大百科全書(ニッポニカ)

[\[7\]](#) 猪瀬直樹前掲書

[\[8\]](#) 越沢明前掲書

出典：[『常盤台住宅地物語』\(中湖康太著 2018.6.30 GCS 出版\)](#)